



AK16001 赤荻 翔基

ラオス伝統的水辺集落における文化的景観の研究

ー シーパンドン、H村を事例として ー

Keywords

文化的景観 水辺集落 母系システム
メコン川 シーパンドン ラオス

1. はじめに

東南アジアの主要な河川流域における伝統的集落では、水上に浮いた住居、高床住居など水域と強く結びついた木造居住文化と暮らし方がみられる。現在、同地域では、こうした水辺集落を世界遺産の暫定リストに加えようとしている。現状では、行政に頼らずとも、地域固有の文化を持つ村々を活性化させる動きみられるが、そうした中でも、生態環境利用の変化や生業の変化により、水辺集落は急速に変化、均質化し、文化的多様性が失われつつある。

2. 研究概要

2. 2 研究目的

本研究は、ラオスの主要な河川であるメコン川流域であるシーパンドン地域を対象地とし、今日まで伝統的な居住文化と文化的景観を保持する水辺集落で、住居と水域の関係、水域の利用に関わる慣習を究明し、水域と親和性の強い文化の実態を明らかにする。最終的に居住文化と文化的景観の再生手法を検討し、他の水辺集落に適応可能な再生モデルとして発信することを目的とする。

2. 3 研究手法

フィールドワークを基に、集落の実態および人々がこれまで営んできた慣習の把握を行う。まず、集落の人口動態、慣習、歴史など基本情報に関する聞き取り調査を行った。次に実測・インタビュー調査を実施した。実測調査では、住居間の距離、路地や河川・水田との位置関係を詳細に記録し、集落平面図・集落断面図を作成した。8軒の住居平面図・断面図を採取した。インタビュー調査では、事前にインタビューシートを作成し、実測調査と平行して行った。質問項目には、被インタビュー者の基本情報に加え、家族構成、所有物の管理方法など合計53項目を設定した。これら実地調査を2019年9/15～19に実施した。

調査によって得た情報を歴史的・社会的視点によって分析する。社会的背景を裏付ける根拠として、文化庁が定める文化的景観の考えを援用する。文化庁によれば、文化的景観とは、以下のように定義される。

『地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土

により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの(文化庁保護法第二条第1項第五号より)』

文化的景観は、日々の生活に根ざした身近な景観であるため、その価値には気づきにくい。その文化的景観を把握することによって、文化的な価値を正しく評価し、地域で護り、次世代へと継承することができる。

さらに客観性を高めるために、UNESCO世界遺産委員会で議論された3つのカテゴリー(注:1)のうち、最も本研究と関わりの深い項目を取り上げる。第3カテゴリー「関連する景観」は、芸術・文化・宗教信仰などと深く関連する景観と定義され、人間の精神活動に直接関連する景観(特に場所)が中心となっている。本研究の場合、文化的景観の特徴・構成要素が、その依拠する伝統・文化・習慣・信仰などと十分に関係しているかがポイントとなる。

2. 4 先行研究と本研究の位置づけ

東南アジアの水辺集落を対象とした先行研究として、チャンタニー・チランタナットらによる「バーン・パクシー村(ルアンパバーン、ラオス)の空間構成に関する考察」(参考文献:1)がある。チャンタニーらはタイ系諸族の住居形式の形成とその変容に関する研究の一環として、ラオスのルアンパバーン県バーン・パクシーBan Paksy村の空間構成(集落構成)とその変容について明らかにしている。タイ系諸族の住居だけにとどまらず、近年の社会変化も考慮して文化との関係性まで深く論述されているが、住居と人々の暮らしによって形成される文化的景観にまで考察が及んでいない。

3. 研究内容

3. 1 調査地概要

3. 1. 1 基本データ

調査地はラオス人民民主共和国(以下、ラオス)南部、チャンパーサク県コーン郡、通称シーパンドンに位置するコーン島のH村である。シーパンドンの位置情報とH村の基本データは図1と表1に示す通りである。

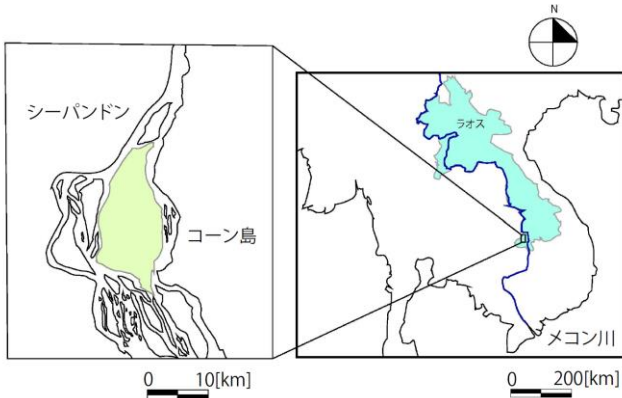


図1 シーパンドンの位置情報

表1 H村の基本データ

民族	ラオ族
人口	1121人
住宅軒数	201軒
男女比	563:558
政治的役割	村長1人、副村長4人
起源	14世紀

H村の起源は、かつて精霊信仰だった地にカンボジアから仏教僧が訪れ、仏教寺を建設したことによる。その寺は現在まで人々の信仰の中心となっている。1968年のフランス植民地時代に、植民地行政が村々を管理するために整備された川沿いの路地は、今でも使用されている。

3. 1. 2 集落の構成

H村は、母系出自による社会集団が組織されているため、家の所有は女性の系譜を辿る。さらに、グループごとに一定の範囲内に集合するのがこの集落の特徴といえる。本研究では、こうした母系の親族集団を基盤として屋敷地を共有する集団を屋敷地共有集団と呼ぶ(図2, 3)。

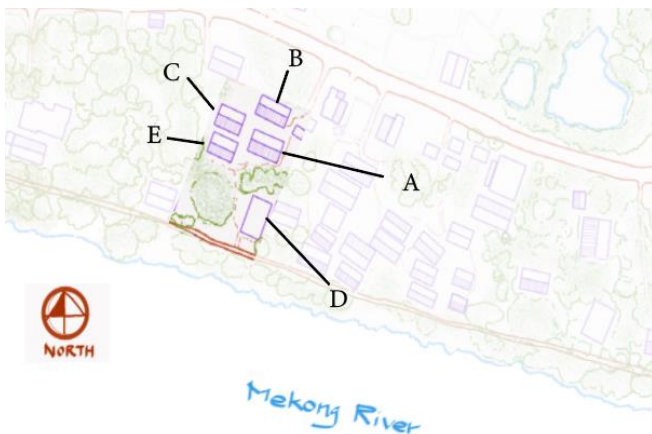


図2 屋敷地共有集団 集落平面図

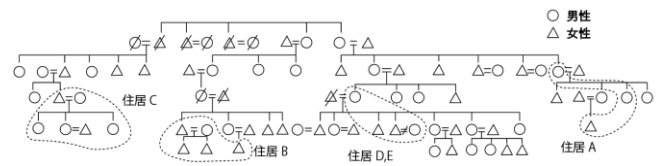


図3 屋敷地共有集団家系図

3. 1. 3 集落の歴史的背景

インドシナ半島では、ラオス以前の王国は繁栄と衰退を繰り返しながら、近隣諸国に支配されながらも存続していた。そのように時代が移り変わると、近隣諸国だけではなく、主に欧州各国による領地や政権争いに巻き込まれてゆく。

19世紀後半より、インドシナ半島に勢力を伸ばしていたフランスは、1893年フランス・シャム条約の締結に成功し、メコン川東岸のラオス全域を植民地とした。フランスは少なからぬ納税と賦役の負担をラオ人に強いたため、1930年代半ばまで反乱が頻発した。その後、日本が第2次世界大戦末期の1945年3月、クーデターを執行してフランス人を追放した。これは、日本によって強制された形式的な独立に過ぎなかったが、フランスの支配を断ち切ることで、ラオスの新しい道を切り開くことになった。

3. 1. 4 社会経済

集落における住民の主な収入源は、漁業または稲作、家畜である。漁業は年間で200~300kg収穫することができ、収穫量のほとんどを換金する。6月が1年の中で最もおおく収穫できる時期であるが、時期によって収穫量が安定しないため、多くの住民は兼業で稲作を行う。1軒ごとに所有する水田の平均面積は5~10haであり、5・6人家族であれば2.5~3haの水田で収穫できる米を年間で消費する。残った稲は来季の田植えに利用するか、3200kip/kgで売ることによって収益にしている。

また、結婚式も1つの社会経済である。H村では、男性から結婚相手の女性の両親に対して1000万kipと2パート相当の金(1パート:約15g)を合算して2200万kipを贈呈する。さらに、追加で結婚式にかかる諸経費(食事、飲み物代金)はその都度決められる。

4. 住宅の物理的特徴

実測及びインタビュー調査を行ったすべての住居は高床式住居の平屋建てで、トタン屋根の板張りである。内部の構成は、居間を中心とした大部屋形式で北側に寝室が設けられる。台所は1Fまたは2Fに設けられており、どちらの場合でも通風に配慮されている。

調査結果から、階段をのぼった入り口部分には露台が

設けられ、玄関的空間として、内と外をつなぐ役割を担う共通点があった。住居は公的領域と私的領域を段階的に分離させるための空間を備えていることを示す（図4）。

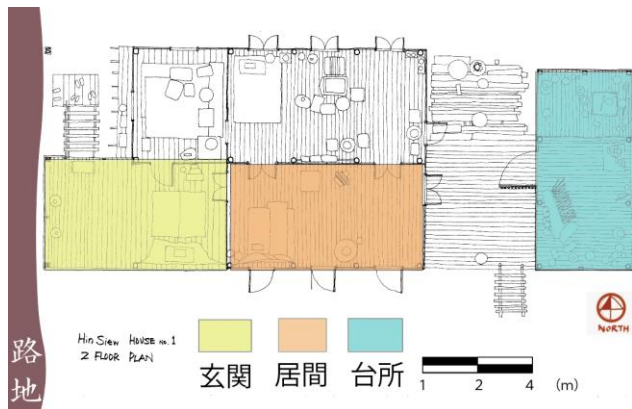


図4 住居2F平面図

5. 集落の空間的特徴

5.1 集落景観

集落には、様々な空間に建物が設置されており、日常生活のシーン毎に、人々の行為が交錯している。

川沿いには、木材・竹材で造られた8畳ほどの広さの小屋が設置されている。その共有空間はハンノンと呼ばれる。ハンノンは集落の中で最も河川に近い住居を建設すると同時に建設され、誰でも利用できる。

川沿いの路地（タンルアン）は、文化的景観の構成要素として歴史的背景を持つ。フランスによる植民地支配の際にフランスがこの地域一帯で植民地支配するにあたり、集落を管理することを容易にするための道を整備したのがこの路地の起源となる。そして今でも日常的に使われており、川沿いに面する集落と集落を行き来することができる。また、タンルアンは人々の経済的活動を行う場所としての側面もある。タンルアンを挟むように両脇に店舗型の商業施設が向かい合って設置されている。人々は集落外の商店まで足を運ばずとも、そこで日用品などを買揃えることが可能である。

住居の裏手にある水田で人々は稲作を行う。一部の農家では、雨季と乾季に二度稲を収穫する二期作を行う。生育するにあたり、雨の降らない乾季には、川から水路で水を引き、これを利用する。この水路は政府によって整備されたものである。

5.2 宗教的特徴としての寺院

かつてメコン川を挟んでラオス南部とカンボジアにはヒンドゥー教、仏教、そして土着信仰が広がっていた。対して、H村では、仏教寺が村の起源となったように、仏教（上座部仏教）が信仰の対象となっている。

人々をあるべき姿に導く僧侶は、H村の住民の生活にも

関わりを持つ。僧侶に関わる儀式のうちの1つ、葬式はこの仏教寺で行う。寺で儀式を終えた後、火葬は椰子が多く生殖する3haほどの広さの場所で行う（事故死、または死亡者が10歳以下の場合には土葬）。火葬後に遺骨を埋葬する場所はパサーと呼ばれている。パサーの位置は生卵を落として割れるか否かで決定する。割ればその位置に埋葬する。もし、割れない場合、それは既にその位置に精霊が存在していることを意味するため、別の場所を探すこととなる。一方、住居を建設する際にも、僧侶に関わることがある。H村の住居では、重要な柱をサオ・クワンと呼ぶ。新しく住居を建設するには、隣の家のサオ・クワンの位置を確認した上で適切な位置決定を行う必要がある。その重要な決定を下すのが僧侶の役割である。

一般的に、集落の空間領域は精神的空間領域（非日常空間）、日常生活空間領域、及びその間にある中間領域（つなぎ空間）に分けることができるとされている（参：3）。これにしたがってH村の空間構造をみると、集落の起源ともなった仏教寺院は今でも人々にとって精神的空間領域であると言える。

UNESCO世界遺産委員会の文化的景観をめぐる議論における、こうした精神的空間領域の取り扱いを見ると第3カテゴリーの「関連する景観」において、先住民族の文化の精神的核心をなす場としての聖地が登録されている。ただし、聖地としてこれまでに登録されている文化的景観の例は、聖地そのもの（山岳・岩塊など）や聖域そのもの（寺社境内など）であり、住民の住居地との関連性について積極的な評価を行う枠組みは存在しない。集落の精神的空間領域としての寺院は日常生活空間領域との関係性に特徴がある。

つまり、川沿いを平行して通る路地が精神的空間領域と日常生活空間領域を接続する機能（つなぎ空間）を持つと考えられるので、精神的空間領域が住居地と意味的連続性を有すると言える。これにより、寺院は集落と一体化して文化的価値を構成することが可能になる（図5）。

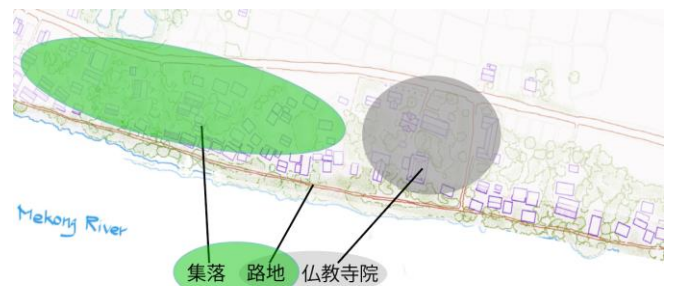


図5 空間領域の一体化

5. 3 観光資源としての砂糖椰子

集落のうち、35軒ほどの家庭で砂糖椰子を栽培している。多くの人が当たり前のようにヤシから砂糖を生産することが可能であるため、砂糖を作れない人はこの村の村人ではないと言われる。周辺地域の他の村で砂糖をつくる村もあるが、H村がコーン郡で最も大きい栽培地帯となっている。この村で一般的な収穫量は、1日で10キロである。これはヤシの木に換算すると8本分である。なお、現在、収穫に適した大きさの木は祖父にあたる代の人々が植えたものである。

今後、政府の支援を受けながら、砂糖椰子は観光資源として開発される見込みである。

6. 考察と分析

6. 1 文化的景観と生業との関わり

シーパンドンでは、雨期に河川の水位が上昇し、河が氾濫する現象が起こる。河川の氾濫によって溢れ出した水は、高床式住居の床下を通り、水田まで到達する。人々はこのように流れ込んできた川水を稲作に利用する。水辺集落に住まう人々にとって、氾濫は日常的な現象で、人々は被害を避けるための対策をとるのではなく、自然と共存し、生業に順応させているのである(図6)。

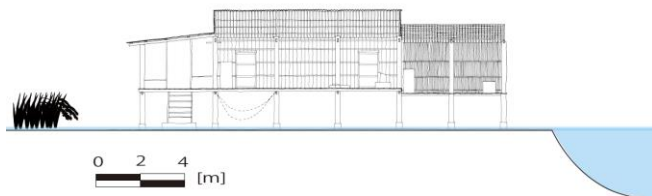


図6 集落断面図(氾濫時)

6. 2 文化的景観の構成要素群の空間的關係

H村の水田は、河川側を表とするならば、寺院の裏手に広がる。その水田の間の小道を抜けた先の森林に、村の守り神が鎮座する。H村では、毎年雨季になると、稲作を始める前に守り神に対して儀礼を行う慣習がみられる。その守り神は水(家畜、人間、農作物)に関わる男の精霊である。儀式の内容は、御供物としてニワトリ、タマゴ、酒を贈呈することにより、守り神に許しを請うものである。その後、農民たちは田植えの作業を開始することが可能となる。

要するに、稲作の作業の節目がコミュニティの行事として定着しているのである。また、稲作を始まりとするこの儀礼は、豊作への祈願にとどまらず、民族の安泰、繁栄を祈願する。

空間的にも生業と宗教的要素とは関連を示している。

水田の奥には、石造の正方形の穴が空いている場所がある。その穴はこの地に先住していたクメール人のものとされ、底が暗くて見えないほどに深い。村の老人は、村の外部から訪れた我々を火葬場へと道案内をする前に、その石造の穴に我々を連れて行った。そして、彼は正方形の穴の1辺に蠟燭を立て、儀式を行った。その儀式は、村の外部者が聖なる空間に足を踏み入れる前、石造のクメール遺構の神に許しを得るためのものである。

水田の一角に空いた石造の穴は、神との双方向通信をはかる空間として現在も機能している。

7. まとめ

H村は単なる空間ではなく、大きく分けて3つ分類される文化的景観によって形成される。1つ目は居住空間としての屋敷地と住居である。住居は母系出自に基づく社会集団の屋敷地内に配置される。次は、二次的生態環境としての河川、水田、路地である。住民は自然現象の変化に対立するのではなく、適応することで文化的景観を維持している。最後は、文化的精神性を持った寺院、クメール遺跡、墓地である。仏教寺院は単に宗教的建造物であるばかりでなく、精神的、空間的に人々の日常生活空間の結節点にある。

今後の研究では、水辺集落における社会的・宗教的背景を持つ文化的景観が観光資源の要素と加わり、どのように文化的価値を高めるかが課題となる。

注釈

(注: 1) それは、1「意匠された景観(designed landscape)」、2「有機的に進化する景観(evolved landscape)」、3「関連する景観(associative landscape)」、の3つである。

(注: 2) 81.41kip/1円、2020/01/09現在

参考文献

- 1) チャンタニー・チランタナット、布野修司、額田直子:「パーン・パクシー村(ルアンパバーン、ラオス)におけるタイ・ラオ族の住居類型に関する考察」, 日本建築学会計画系論文集第75巻第652号1415-1422, 2010年6月
- 2) 須藤健一:「ミクロネシアにおける母系制社会の変質—トラック語圏社会の出自集団の構造—」, 国立民族学博物館研究報告10巻4号
- 3) 山村高樹、張天新:「文化的景観と場所論:『文化的景観』概念の歴史的市街地保全への適用に関する考察」, 京都嵯峨芸術大学紀要, 29, 21-35, 2004年3月
- 4) 京都大学東南アジア研究センター編:「事典・東南アジア 風土・生態・環境」, 弘文堂, 1997年3月
- 5) 友原嘉彦:「タナトス・ツーリズムのあり方と可能性」四日市大学総合政策学部論文集, 12 (1, 2), pp. 11-17, 2013